

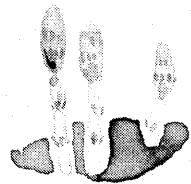
私の保育

カバン入れにも靴箱にも名前をはり終わり、子どもたちを迎え入れるばかりに準備の整った保育室内を、まだあちこち不安気に歩き回る。そのうちひとり、ふたり、五人六人としだいにふえてくる子どもたちと、さり気なさを装って「おはようございます」の言葉をかわしながら、互いに好奇の目を向けあう。そんな出会いから、保育者としての私とクラスの子どもたちとの新しい生活が始まった。

五歳児二十九名。これが私の初めて担任したクラスだった。ベテランの先生と一緒に年少組を過ごし、それなりに園に慣れた子どもたちに接した時、保育技術もほとんどない新米の私は、何しろ彼らの中にとびこんで共に遊び、暮らすより他に方法はないように感じられた。一瞬も早く仲良しになることを

望みながら、子どもの出すいろいろな遊びに懸命についてまわる。正直なところ、一学期のうち、子どもたちは私にとってこわいぐらいの存在であった。

夏休みを終えると、子どもたちは驚くほど大きくなっていた。運動会に、学芸会にと、小学校とも関連した多くの行事を経験しながら、私は自分が保育者としての構えなどどこかへ吹き飛ばされた、ほんの少し大きな友だちとして、子どもたちにとり囲まれていることを感じた。創造的、活動的な子どもたちは、一日を楽しく内外共に充実して過ごすことの天才である。多くの天才に囲まれた毎日の生活から、徐々に保育者としての指導の芽を与えられつつ、最初の一年はまたたく間に過ぎた。そして無我夢中で過ごした時をあらためてふり返った時初めて、子



中村美智子

どもがかわいいものという感情が湧きおこってきたように思っ
た。

この四月に迎えた新入園児は、卒園していった子どもたちに
慣れたばかりの私にはあまりに幼かった。しかし母親に手をひ
かれて登園する彼らの目は、新しいカバンやスモックと同じよ
うにきらきらと光っている。私はそこに今までの経験から得た
ものとはまた別の、せつぱつまったような感激を覚えた。輝く
目を受けとめる私の気持ちは全く新しいものであった。そこで
現在のこの四歳児クラス三十五人のこれまでの記録を読み返し
ながら、子どもたちの動きから感じた事を綴っていきたいと思
う。

★ ★ ★ ★

一クラスの数が多いので、入園式後一週間だけ、クラスを
半分に分け二部保育を行なった。これは園の先生方と事前に何
度も話し合いをし、初めて登園する子どもたちにくらかでも
ていねいに接することができるように、という意図から行なう
事になったものである。

午前九時に十八人の子どもが登園する。カバンをおく所や、
自由画帳やクレヨンなどのはいつているひきだしを、「Aちゃ
んのは青い自動車よ。ほら、ここにもひきだしにもちゃんとつ

いているでしょう」と、ひとりずつ手をとって教えていった。
ところがその間、子どもはただ黙って私のあとをくつついてく
るだけである。早番の子どもが帰った後、私は何だかとても
の足りない感じがしていた。そこで遅番の子どもたちが登園し
た時、少し方法を変えてみた。「Kちゃん、カバンはここにお
きましようね。あら、何かついているわね」とその子どもの印
となるものを指し、「Kちゃん、これと同じ印のついているひ
きだしあるかしら」と、こんどは子どもが自分で部屋の中を歩
いて積極的に見つけられるようにした。もちろん、それでもど
うしてよいかわからず、あらぬ方を見てつ立つたままの子ど
ももいたが、多くは意欲的に動き、同じ印を見つけてはうれし
そうになっことりした。そんな子どもの表情を見て、私は保育者
側からの一方通行だけでなく、小さいけれども子どもと心を通
じ合う接点をみつけたように思った。

室内においてあるミニカーやままごと、その他いろいろなあ
そび道具をまだ十分に使いきれない子どもたちは、何となくぎ
つしりとかたまった感じである。じゅうたんを歩いてままごと
を出し、一緒にごちそうなどをつくって遊んでいても、途中で
遅く登園してきた子どもを私が迎えにいったりすると、遊びは
そのまま中断され、もう戻ってきてもうまくは続かない状態だ

った。それに、私自身が、始めのうちはできるだけ平等にどの子にも接しなければと思ったことから、結果的にはポツンポツンと切れた所にいる子どもたちの間を渡り歩くだけに終わってしまうことが多かった。ある子どもと接しているときに、すでに、別の子どものところへも行かなければというあせりのようなものが働いていて、気持ちの上で時間をかけてつき合うということが全くできなかった。

自分のところから先生が離れていってしまうと、それまでしていたことをやめて、勝手にひき出しから自由画帳とクレヨンを取り出し、絵を描き始める子どもがいた。最初は何となく手を動かしていたのかもしれないが、私が気がついて見るころには実に楽しそうに思いのままに描いている。体の中から発する自然なエネルギーが、そのまま手を通して紙面に現われてくるように見える。そこには何の無理もなく、本当に自由な世界があるようだった。クレヨン握っておもしろそうにしている子を見て、それを真似て行動する子が出てきた。私がたったひとつの事に気をとられ、あせっている間に、絵を描くという動きが連鎖反応的にたちまち広がって、入園式後三日目ぐらいから、登園後しばらくの時間を自由画帳とつき合う子どもが多くなった。

さまざまに描いている子どもたちの間をのぞくと、「先生、これメロン」と黄緑のクレヨンでただグルグルとなぐりがきしたようなのを得意そうに見せてくれた。「あら、そう、とても大きくておいしそうね」と言うと、「うん」と元気よくうなずき、「こんどはモモン」と言ってピンクのクレヨンでまた同じように描いた。次々と描いては「先生」と大声で呼び、ひとつひとつ見せてくれる。隣の子のをそっと見ると、「これね、でんしゃ」と小さい声で、それでもさもうれしそうに自分の描いた四角い絵を指さして説明してくれる。チューリップばかり描く女の子もいた。しかし、どのようなものにせよ、好きなように絵を描き、それを私に見せてくれる子どもたちの顔は、大変のびやかだった。そして子どもたちが進んで私に近づいてくれたことが感じられた。それから時々、自分でも描きながら隣で描いている子の顔を見たり部屋の中を見回したりする動きが見えはじめ、その機会をとらえて私がことばかけをすると、隣どうし、につこり笑ったり、自分から遊びたいものの方へ出ていって、いろいろな道具を徐々に自分たちのものとする過程が見られた。こんな子どもたちのようすを見て、私は、無意識のうちに子どもが早く園に慣れてくれることを形の上から急ぎすぎ、入園間もない子どもを的確にとらえていなかった自分に気が

付いた。そして、目前の子どもたちから逆に教えられた思いがした。

同じことを一日のうちに二度繰り返すことは大変であったが、前のやり方で反省した事をほとんど同じ条件の子どもにもすぐ実践できた事で、特に、初めて新入園児を迎えた私には学んだ事が非常に多くあり、ありがたかった。

入園式後の一週間を終え、再びクラス全員が集まっていた保育を始めた時、私は急に二倍にふえた子どもの数に対して少なからず混乱した。今でもとき折そうなる事がある。一日をどのように過ごしたのかどうしても思い出せない子が、何人かは必ずといってよいほど出てくるのである。どこにいても目は配るように心がけてはいるものの、まだ腰の重すぎる私で自分の体がなかなか思うようにはついてまわらない。そんなときにはせめて、翌日、遊んでいるところへそっと入れてもらったりして、直接意識にのぼらせるほどの目を向けるようにした。そして反省記録を書く事にじっと取りくむ事とした。これは、保育中に子どもと対している自分はいかに生々しいが、一日の保育をふり返って子どもの動きなどを文字に表わす段になると、保育中とはまた別の目が生まれ、考える事ができるからでもある。

★ ★ ★ ★

園のかわいらしい砂場は、ちょうど部屋の真前にある。室内での子どもたちがだいぶおちついてきたころをみはからって、誘いあわせて砂場に出た。日常生活をほとんどコンクリートで固められた中で送っているこの地域の子どもたちには、土や砂から得られる感触などごく縁の薄かったものにちがいない。自分の前のほんの少しの砂をさらさらとこぼしたりすくったりするのが初めてであった。私がジョウロやバケツに水を入れて子どもの手の上や下にある砂にかけると、今までとは違ったしっとりした手ざわりに不思議そうであった。バケツのおいてあるところをいち早く見つけ、とんでいって水を汲んでくる子、湿った砂を何となく手にとったりしているうちにおだんごができる子、砂のとられたへこんだ所を更に掘り下げていく子等々、それからは私のことばかけなどほとんど待たずに、すごい勢いで砂遊びは発展していった。「あつ、お水が流れてきた！」と言っただけであわててそこへ手を出し、元の方を見る。流れた水の筋から、また砂場というつながった地面から、子どもたちは互いの存在を少しずつ確認し、共通の感覚を喜んだ。夢中になればなるほど、ことばのやりとりも少なくなるようだが、友だちとのつながりは逆に増していくようだった。たいていの子にとつて、今や砂場は最も魅力ある遊び場となっている。登園すると

上ばきもはずにすぐ砂場用の靴をはき、「先生、ちょっとこれおいてきて！」とあわただしくカバンを私におしつけて、砂場にとんでいく姿を見て、驚かされたこともあった。お帰り間ぎわ、私は毎日のように砂だらけになった足をきれいにしたり、服をとり替えてやったりすることに追われる。その時、やっでもらう子どもの顔が清々しく、私の肩につかまる手には満足した、たくましい力がこめられているように感じられるととてもうれしい。そして、砂遊びが盛んになるにつれて、ままごとやいろいろな材料を使つての製作など他の遊びも活発に行なわれるようになった。

★ ★ ★ ★

しかし、子どもたちが一日毎に伸びてくるのとは逆に、保育者である私の動きが次第に消極的になってしまふことがあった。ほとんどの子が園生活に慣れ、そろそろ騒がしくもなってきた夏休みも間近のことである。その時は自分でも何だか変だと思ひながら、なぜそうなるのかがなかなかわからなかった。そこで『幼稚園真諦』を繰り返し読んだり、研修会などで多くの先生方のお話をうかがったりしたが、そこから私は自分の動きが小さくなつてきたことについての解決の糸口が次のように得られてくる気がした。子ども自身の遊びが活発になることを願う

私は、生き生きと活動していることが見られると満足感を覚えてしまい、その充実した活動を更に先へ発展させるにはどうしたらよいかと子どもにも考えさせる役割をとることに欠けていた。園に慣れ、存分に自力を発揮できるという、最初に私の目的としたことが達せられる時期にきた子どもがふえるにかかわらず、私の目は大部分がまだひとりで縮こまっている子の方に向きすぎていて、活発な子どもの活動が彼らに任せきりに近い状態になっていたこともあった。ある時、ある日は楽しく遊べても、期間を通してみると系統的でなく、断片的な遊びですぐす毎日になりがちであつたのである。保育者は子どもの活動の前面に出てはならないが、後にひつ込みすぎてもだめである。子どものもつ力は私が考えているよりも、きつと何倍も大きなものに違ひない。その力を信じて、一歩先が見える保育ができるようにならなければならないと思う。一日毎に自分の未熟さを思い知らされる現在の私であるが、恐れずに、子どもたちとけ合った日々を経験していきたいと願っている。そしてそれができるには、まだまだ努力のいる私でもある。

(千代田区立錦華幼稚園)